

## 2021年度研究成果発表会シンポジウム

## テーマ『学びの変革－主体的・対話的で深い学びの実現－』

基調提案	授業実践探究コース教授	岡 陽子*1
演 題	「学びの変革－学習者主体の指導と評価を考える－」	
シンポジウム	「学びの変革－主体的・対話的で深い学びの実現－」	
登壇者	嬉野市立轟小学校校長	宮崎 耕一
	伊万里市立南波多郷学館指導教諭	井手 瑞恵
	神崎市立仁比山小学校教諭	石井 豪
	太良町立多良中学校教諭	竹下 遼
	佐賀県立小城高等学校教諭	石橋 俊
司 会	授業実践探究コース准教授	米田 重和
日 時	2022年2月17日（木）10時20分～12時00分	
場 所	佐賀大学本庄キャンパス（オンライン開催）	

## 【テーマ設定】

新学習指導要領は2020年度から小学校で、2021年度から中学校で全面実施、2022年度から高等学校で学年進行により実施されている。そこでは、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることが求められている。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、学校現場ではどのような学びの変革が起きているのか、基調提案やシンポジスト報告により紹介する。基調提案では、「主体的・対話的で深い学び」に関する現状や課題と共に、学習者主体の指導と評価についての研究の一端を交えて紹介する。シンポジスト報告では、校長、研究主任、小学校の中堅教員、中学校の若手数学教員、高等学校の中堅英語教員がそれぞれ異なる立場から現在学校現場で起こってきている学びの変革についての報告をした上で、ディスカッションを行う。これらを踏まえて、今後学校現場で求められる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学びの変革について考えてみたい。

## 【米田】

みなさん、おはようございます。本日はお忙しい中、令和3年度佐賀大学大学院学校教育学研究科研究成果発表会のシンポジウムにご参加頂き、ありがとうございます。このシンポジウムの司会を務めます米田重和と申します。今回のシンポジウムのテーマは、「学びの変革－主体的・対話的で深い学びの実現－」です。シンポジウムの流れを説明します。まず、基調提案を行います。続いて、シンポジストによる報告とディスカッションを行います。その後、参加者の方々と意見交換を行いたいと考えております。参加者の皆様にいくつかお願いがございます。カメラとマイクについては、オフで

\*1 佐賀大学大学院学校教育学研究科（当時、現在は退職）

ご参加ください。意見交換の時間に発言される時は、挙手機能かチャット機能を使ってお知らせください。指名がありましたら、マイクをオンにし、可能であればカメラをオンにしてお話してください。これから基調提案をされる岡先生、シンポジストの先生方はカメラをオンに、他の参加者の方々はカメラをオフにしてください。では、これより本学の学校教育学研究科、岡より基調提案を行います。よろしく申し上げます。

## 基調提案

### 【岡】

学校教育学研究科の岡でございます。今日は私の方から基調提案を 20 分程させていただきます。「学びの変革—学習者主体の指導と評価を考える—」と題して、話をさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。最初に、この 20 分間で皆様と共に考えていきたいことを、2 つ話をさせていただきます。1 つは、学びとは何かということです。2 つ目は、評価を資質・能力との関係で捉えるとどう具体化できるかということです。どうぞよろしくお願い致します。

さて、皆様ご承知の通り、新しい教育課程となり、去年、今年と 2 年目となりました。いよいよこの 4 月からは、高校も新しい指導要領の下、教育課程がスタート致します。今回の改訂は、内容ベースから資質・能力ベースへと大変革が行われた改訂でもあります。何ができるようになるかという資質・能力を汎用的資質・能力を明確にして、それをどのような内容で学ぶかといったことがそれと連動して示されました。今までの改訂の時期には、ここ何を学ぶかという所が中心だったわけですが、今回は資質・能力に応じて何を学ぶのか、そしてどのように学ぶのかという主体的・対話的で深い学びの授業改善の視点が示されたところですが、新しい時代に求められる資質・能力を育むためには、どんなことが重要なのか、どんな力が必要なのか考えていきたいと思えます。

今回の学習指導要領解説のすべての教科の解説にこのような文言が示されています。「このような時代にあって」というのは厳しい挑戦の時代と定義されています。厳しい挑戦の時代に子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していく力、また、知識の概念的な理解を図る力、情報を再構成する力、新たな価値や目的を創造できる、再構築できる力、こういったことがこれからの時代には求められると示されています。また、世界的な潮流として汎用的な能力の育成を重視するということがあるけれども、我が国では、これまでの知識・技能、思考力・判断力・表現力のバランスを重視していくというのはこれまでと同様であるということが示されました。まとめますと、他者との協働による課題解決、知識の概念的な理解・知識の再構成、新たな価値・目的の創造・再構築、こういったものが今回の学習指導要領で初めて解説にしっかりと示されたということです。それとこれまでのバランスという 5 つが大きな柱ではないかと私自身は捉えています。

このように、時代が求める資質・能力を小・中・高と育てていくこと、またそのための主体的・対話的で深い学びの実現が重要となります。さて、ここで先程申しました汎用的な能力に関わる世界の考え方を見てみます。中教審答申の資料ですので、少し古いですが OECD、DeSeCo のキーコンピテンシー、EU、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカの 21 世紀スキル、こういったものが汎用的資質・能力として示されているところです。大括りで見ると、この 3 つ(基本的リテラシー・認知スキル・社会スキル)となります。それに日本を重ね合わせますと、この資質・能力の 3 つの柱(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等)となるのでしょうか。確実にきちっとは分けられませんが、この 3 つの資質・能力の柱が日本の汎用的能力というふう捉えることができると思えます。

この資質・能力の3つの柱は、全教科等で育むものとして示されており、生きる力につながるものとして示されています。そしてそのためには、主体的・対話的で深い学びの実現が大きな鍵を握ると言えます。

この主体的・対話的で深い学びについては、答申にこのように示されています。皆様ご承知の通りです。主体的な学びというのは、学ぶことに興味や関心を持って、見通しを持ち、次につながる学びであるということ。対話的な学びというのは、協働、対話、先哲の考え方等を手掛かりに自己の考えを広げ深める学びであるということ。深い学びとは、学びの過程で見方・考え方を働かせながらより深く理解したり、考えを形成したり、解決策を考えたり、新たなことを創造したりすることに向かう深い学びというふうを示されています。

では、ここで考えて頂けるとありがたいのですが、ここで使っている学びとは一体どういうものなのかということ。普段に使っていますが、何気なく使っていますが、果たしてその学びとは一体どういうものなのか、また、主体的・対話的で深い学びを実現させたいと言いながらも、見通しを持たせよう、振り返りをさせよう、対話をさせようという〇〇させようループに陥ってはいないか、ということは絶えず自分の指導を振り返っていくということが重要だと思います。つまり、これは型に持ち込もうとしているのではないかということ。

では、ここで今井氏の学びについて見ていきたいと思います。今井氏は、学びとはあくなき探究のプロセスだと言っています。ちょっと見てみます。単なる知識の習得や積み重ねではなく、すでにある知識から全く新しい知識を生み出す、その知識の発見と創造こそ本質なのだと言っています。小さな子どもたちが言葉を覚えていく時に、その知識は断片的な事実の寄せ集めではなく、システムとして子どもの中に入って行く。子どもは語彙という巨大な知識のシステムを、その仕組みを発見しながら自分の力で作り上げて行く。知識は常にダイナミックに変化し、生き物のように成長し、今ある知識が新しい知識を創造していく。誰もがこういった生きた知識の学びをしてきたと思うんですね。この知識構築・創造の姿こそ、主体的な学びの本来の姿であるはずだというふうに今井氏は述べています。

私自身もですね、このあくなき探究のプロセス、知識の発見・創造こそ重要だと捉えています。この学びこそが、学習指導要領が新たに示したこういった能力(他者との協働による課題解決、知識の概念的理解・再構成、新たな価値の創造、目的の再構築)の育成に向かっていくのではないかと考えます。

ここで、ノーベル賞を受賞された野依氏が Web 上で発信された言葉をご紹介します。『「本気で怒っている」日本の教育に危機感』と題しまして、メッセージを寄せてらっしゃいました。考える力、答える力が落ちていると言いますが、最も心配なのは問う力がほとんどないこと。誰かに作ってもらった問題に答える習慣が染みついている。幼い子どもたちは好奇心を持つが、学校教育が疑いを持つことを許さないのではないかということです。確かに幼稚園児は好奇心の塊ですよ。それが、学校教育が進むに連れて、そういったところが少しずつそぎ落とされていく。先生、次は何を教えてくださいと口をばくばく開けて待つ子どもになってしまっていないか。そうではなく、自ら探究しようとする学習者主体の授業が重要ではないかと捉えています。

それでは、学習者主体とは一体何なのか、考えてみたいと思います。私自身は、子どもがあくなき探究の世界で学ぶことだと考えています。(スライドの)右下に書いてありますように、我々教師は子どもたちの目の前にある膨大な知識にとられて、それらを子どもたちに記憶させる、再生産させることに熱中するあまり、子どもたちをこの学校の枠の中に閉じ込めてしまっていないだろうか

いったことが私自身の反省としてもあります。つまり、子どもたちの視点が学習対象ではなく、先生や学習成績の方ばかりに向いているのではないかということです。そうではなく、子どもたちの視点がしっかりと学習対象の方に向くこと、そのためには先生自身が学習対象をしっかりとつかむことが重要です。先生の扱う教材や学習材の深さ、楽しさ、有意味性、文化的価値、社会的価値、科学の不思議さ・面白さ、そういったものを先生自身が教材研究の中でがっつりとつかむ、そこが子どもたちと同じ学習対象に向かう学びの世界を作るのではないかと思います。子どもたちが学習対象に向いた時、先生と共に向いた時にそこに子どもの主体が生まれると考えます。その中で、「先生、これって何？」と子どもたち同士で対話が始まる、先生に聞く、みんなで話が生まれてくる、そこに対話が生まれるのではないかというふうに考えます。それが、あくなき探究の世界ではないかと思ひますし、その中で子どもたちの深い学びが生まれると捉えています。

ただここで少し厄介なのは、やはり先生方はここで生まれた成果を評価しなければいけないということです。それから、目的に沿って評価をし、子どもたちがどのような学びにあるかというのを把握しなければならぬということがあります。今回この評価については、子どもの評価という視点も強く打ち出されています。今日はこの話はできませんが、教師の評価に限って見ていきますと、やはり指導と評価を一体的に捉えて評価の在り方から指導を見直すことが重要だと考えています。なぜなら、評価というのは、1人ひとりの子どもたちに対して、先生たちが行うものです。学習指導要領が文言をいくら変えても指導を変えることはできませんが、評価の在り方を変えるということは、指導の在り方を変えることと直結すると捉えています。それは、1人ひとりの子どもたちに対して、指導を変えていくということになるのではないかと思っています。評価の在り方から指導を見直すことが重要ではないでしょうか。

今回は、資質・能力の3つの柱と学習評価の3つの観点と表と裏の関係でしっかりと明示されました。中教審でこういうふうに指導と評価を、資質・能力と評価を一体的に議論したのは今回初めてです。また今回、表と裏の関係で示されたというのも戦後初めてだと思います。すなわち、評価に言及することで真の学びに近づくことができるのではないかというふうに私自身は捉えております。

京都大学の石井先生がこういった資料(「学校で育てる能力の階層性(質的レベル)を捉える枠組み」)を出されています。中教審答申でも、またご自身の著書でも示されている資料です。学校で育てる能力の質的レベルを捉える枠組みです。(図の)左の下の方に認知システムの中に、マルザーノの「学習の次元」、真ん中にウィギンズらの「知の構造」を示しておられて、私が素晴らしいと思うのは、この右側に評価方法の選択というのが挙げられている。この3つを一体的に示した図として大変面白いなと思っています。

まず、学力・学習の質で捉えていきます。知識・技能をこの2つの層で示してあります。1つは、知識の獲得と定着、知っている・できるレベル、個別の知識・技能ということです。それが深まってくると、分かるレベルに入ります。知識の意味理解と洗練ということです。概念化ということですね。それがさらに質的に高まると、思考力・判断力・表現力を使うということになると思いますが、知識の有意義な使用と創造ですね、課題を解決できる力ということです。この資質・能力は教科の内容で捉えるとどうなのか内容知を見ますと、事実に知識、概念的知識、原理というふうに質が高まります。方法知は、技能、方略、方法論と高まっていきます。これだけ言うと抽象的で、ものがあまりよくは見えてこないんですが、これらの能力と学習評価を関連して見ていくと指導の具体が見えてくるというふうに考えます。

個別の知識・技能は、この客観テスト、イメージできると思います。先生方であれば、こういうテ

スト(選択問題, 空所補充問題, 組み合わせ問題, 基礎実技テスト等)ね, こういうテストの時にはどういった指導をすればいいのかなということはありませんし, 次の分かるレベルというのは表像や思考のプロセスの表現, それをこういったここに書かれている(描画法, 概念地図法, 感情曲線, 簡単な論述問題, 文章題等)こういったもので見ていく。こういったことができるようにするためには, どういった指導が必要なのかということが重要だと思います。それから, 私が最も重要だと思うのがここでですね, 3番目, 真正の文脈における活動や作品, パフォーマンス評価ということです。複雑な文章題, 小論文, レポート, 作品製作・発表, パフォーマンス課題等, こういったリアルな学び, オーセンティックな学びの中で子どもたちがどうパフォーマンスを見せてくれるのか, そういったことができるようにするためにはどんな指導を行うのか, そろが非常に重要だと捉えています。真正の文脈における活動や作品に基づく評価ということです。リアルな文脈, 本物の学びをどう作っていくのかということが大切ではないかなと思います。

真正の学びについては, 石井先生がこの言葉を使って説明もされていますし, 真正の学習は奈須正裕も同じようなことを言っていると思います。真正の学びを最初に提案したのは, ニューマンだと聞いておりますので, ニューマンの真正の学びについて少し見ていきたいと思っています。

ニューマンは, 真正の学びを有意味で価値のある知的な学びと定義しています。そのための3つの基準を挙げています。それを見ていきますが, 「知識の構築」, 今までずっと言ってきたことなんですが, 既存の知識を土台としつつも, 自らの知識や技術を磨くことである, そういった学びが1つの基準です。それから「鍛錬された探究」です。既存の知識基盤を活用, 深い理解を通して追究する, 卓説したコミュニケーション, 対話ですね, 協働ですね, そういったものを通して自分の考えや新しいこと見つけてそれを表明することである, そういった学びがあるかどうか。それから最も重視したいのが3番目の「学校外での学びの価値」ということです。真正の学びには教室を超えた世界との結びつきが欠かせない, 教室を超えた世界との結びつき, 学校の枠から飛び出していったその世界との結びつきが重要であると。生活や社会と結びついた学びの中に, 学校での成功を指し示すことを超えた価値を持つようになる。つまり, 生涯学び続けるその価値というのをそこで何らかの形でつかむことができるのではないかと捉えます。その時には, 学習外の聴衆も一定の役割を果たすと示しています。

私自身は年に1回や学期に1回でもいい, 子どもたちに本物の学びをがっつり感じさせるそういう本物の学びの存在が重要ではないかというふうに捉えています。それが今回のこういった力につなげていくことになるのではないかということです。

さて, 中教審答申では, 今回評価を見直すための多様な評価方法についても言及されています。パフォーマンス評価, ルーブリック, ポートフォリオ評価, もう既に取り組んでおられる先生方, 学校も多いと思いますが, こういったものについてももう一度ですね, 何故そういうことをやるのかということをつかえつつ, 授業を進めてもらおうとまた新しいことが見えてくるのではないかと思います。

さて, 最後になりました。「主体的・対話的で深い学び」とは, 子どもが学習対象に向かい, あくなき探究を繰り返すことだと私自身は考えます。このあくなき探究の世界に誘う教師の指導とは何なのか, ここに学びの変革のためのヒントがあると考えています。今日はこれから5名の先生方に主体的・対話的で深い学びの実現について, それぞれのお立場から実践を語って頂きます。先生方の具体の語りの中に, 知識の構築や創造, また本物の学びといえる学びの変革につながるヒントがたくさん潜んでいます。散りばめられていると思います。ぜひ皆様と一緒に今日は, 学びとは何かを考えていければと思っています。どうぞよろしくお願ひ致します。引用・参考文献は以上です。どうもご清聴ありがとうございました。

## シンポジスト報告

### 【米田】

最初のシンポジスト報告は、宮崎先生です。「主体的・対話的で深い学び」を実現するための実践というテーマです。地域と学校、カリキュラム・マネジメントの視点から報告してもらいます。それでは、よろしくお願いします。

### 【宮崎】

はい、ではよろしくお願い致します。画面の共有をします。

それでは嬉野市立轟小学校の校長宮崎でございます。よろしくお願い致します。

## 地域とつながる管理職の立場から

私には、先程の基調提案の中での岡先生の方から、地域と繋がる管理職の立場からということでお話を頂いておりますので、この立場でいくらかお話をさせてください。まず管理職の立場ということですので、担任という子どもたちの前に立たれる先生方はどうやってと、方法の方を考えられると思いますが、管理職、校長としましては、それが、なぜ、どうしてという所ですね。そこの目的、趣旨、いわゆる目的や理由っていうのをしっかりとおさえることが一つ大事な役割であるというふうに思っています。

## 目次・発表内容

そういう意味で、ご参加の皆さんは釈迦に説法の部分もあるかもしれませんが、改めてということで、「主体的・対話的で深い学び」の部分では何の為に行わなければならないのか、なぜしないといけないのか、それからそれが今を生きる子どもたちにとって実の学びとなるためにという1つの方法ということで、お話させていただきます。

まず、何のためにというのは、今回改訂された学習指導要領の前文、それから先程も少し出てきましたが、令和の日本型学校教育の構築というのをキーワードにお話をします。

## 小学校学習指導要領前文について

まず学習指導要領前文についてですけれども、これは小学校の学習指導要領の総則の前文です。ご覧になったことはあるでしょうか。実はこれまでの学習指導要領にはこういうのがありませんでした。

今回の改訂で、教育の理念という形で、あるいは学校に求められる要請されているものということで、色々記してあって、その中で私はこの所がもっとも大切であると思います。これは、小学校、中学校、高等学校と全てに書いてあって全く同じです。唯一違う所は、児童が生徒となっていることでありまして、読み上げますが、これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、この教育の目的というのは、教育基本法の第1条、目標は第2条のことになりますが、そういう目標達成を目指す一人一人の児童が自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められると書いてあります。

## 変化の激しい社会を生き抜くためには

これは、変化の激しいこれからの社会、もっと言い換えますとこれまでに蓄積した知識や経験に基

づく正解のない社会，そこを他者と協働してたくましく生き，新しい価値や文化，あるいは納得とい  
っていいでしょうか。そういうものを備えた社会の創り手を育成しなければならないという学校教育  
の要請が明記されています。ですから，こういう社会の創り手を育てるために，「主体的・対話的で  
深い学び」が必要であるということ。

これは，教える我々としては，大きな目標としてしっかりもっておかなければならないと思ってお  
ります。このことは，後にも少し触れますが，うちの先生，職員にも話をしているところで，学校教  
育目標にも，1つ掲げております。

### その具現化を図るために

その具現化を図るために，これは学習指導要領に書いてある4つのポイントなんですけども，社会  
に開かれた教育課程の実現でありますとか，目指すべき資質・能力の育成，カリキュラム・マネジメ  
ント，そして「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善というもの，こういうものが，相  
互に補完しながら有機的に機能することが先程ご紹介しました前文の趣旨を踏まえた教育活動に資す  
ることは，言うまでもないという風に思っております。

ですから，そういう意味でも「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善も非常に重要な  
ことであって，これはただ単に学力を向上させるということはもちろんのことなんですけども，持続  
可能な社会の創り手として主体的な人生を送ることは，将来に渡って，そういう子どもを育てる，と  
ても大事な目的のためにやっていると言うことを我々指導する人間としては，心に留めながら子ども  
たちに臨まなければならないという風に思っております。

### 令和に日本型学校教育について

それともう一つ，令和の日本型学校教育の実現を目指した学校教育がありまして，これは令和3年  
1月26日に中教審から答申がだされたものであります。その抜粋したものになるんですけども，これ  
は従来の日本型学校教育を発展させて令和の日本型教育を実現しようと言うことなんですけども，そ  
の大きなキーワード，取り組みが2つありまして，個別最適な学びというのと協働的な学び，これを  
一体的に充実させていきたいと思いますということになっております。

それを行う上で，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善をやっていかなければなら  
ないということですので，そういう意味でもこの取り組みは非常に重要であるという風に認識をし，  
このことについてもやはり本校の先生方には，「こういう為にやるんだよ。」ということを示しながら  
やっているところです。

ごめんなさい，釈迦に説法みたいになりましたが，やはり何のためにということが大事だと思いま  
すので，この所はしっかりと認識をするべきでありますし，こういう所が，やはり管理職の1つ重要  
な仕事の1つではないだろうかと思っております。

### 今を生きる子どもたちにとり実の学びとなるために

そういう目的の為に，私に頂いているものもう1つが，今を生きる子どもたちにとり実の学びと  
なるためにということで，これも学習指導要領の改訂で求められている社会に開かれた，教育課程の  
実現に向けた取り組みということで，今やっていることです。

### 社会に開かれた教育 3つのポイントについて

この社会に開かれた3つの教育課程のポイントとありますが、この前に前提として学校運営協議会が設置するコミュニティスクールの導入でありますとか、両輪となる地域学校協働本部、もしくは、それに類似するような組織の協働というのは前提としてお話をさせていただきます。もちろんそれがなくてもできないことはないのしょうけれども、やはり、その組織、2つの組織があつてのコミュニティスクールというのが私の実感であります。それを前提として、3つのポイント、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有するという、それからこれからの社会を創り出していく子どもたちに必要な資質・能力が何かを明らかにし、それを学校教育で育成をする。そして地域と連携、協働しながら目指すべき学校教育が実現することを大事にしながら取り組んでいるところであります。

### 社会に開かれた教育の際に取り組むこと

その際に、今を生きる子どもたちが社会の創り手として実践的な学びができるよう、可能な限り、単に地域連携というような取り組み、いわゆる子どもたちがお客さんとして行って活動するのではなくて、可能な限り地域の振興や地域の課題解決に資するような活動に取り組ませることが望ましいと思っております。

その中で、地域課題でありますので、そんなに簡単に子どもたちの取り組みで解決できる、あるいは良い方向に向くものはないのしょうけれども、そういう地域課題という生きた課題に臨むことで、地域人材とコミュニケーションすることや課題を解決するために行う「主体的・対話的で深い学び」が実の学びとして子どもたちの身に付くことが期待しているということでもあります。

### 社会に開かれた教育について

加えて活動が契機となり、気運の醸成や取り組みの広がりが図られたり、社会のつながりの中で学ばな、励ましや感謝、労いの言葉などをかけられたりすることで、子どもたちなりに自分たちも社会をよりよくできるという実感を持ち、社会の創り手として意識の萌芽が見られることはもとより、自己肯定感や自己有用感などの育成にも必ず資するという風に考えています。このあたりは先程、岡先生の話にもありました、ニューマンの真正の学び、校外での学びの価値というものもあるのしょうし、岡先生がおっしゃった本物の学びということが言えると考えております。

いずれにしても、こういう所を念頭に置きながら、社会に開かれた教育の実現に向けて取り組んでいる所でもあります。

### 引用・参考文献の提示

引用・参考文献はこの2つであります。以上報告を終わります。

#### 【米田】

宮崎先生ありがとうございました。次は井手先生です。校内研修と職員の協働の視点から報告してもらいます。それではよろしくお願ひいたします。

#### 【井手】

では、画面を共有させていただきます。伊万里市立南波多郷学館の井手瑞恵です。今から校内研修

と職員の協働の視点から、本校での実践を中心にお話をさせていただきたいと思っております。よろしくお願いたします。流れとしては次の4つです。まず1つ目として、義務教育学校における職員の協働です。

## 義務教育学校における職員の協働

### (1) 本校の概要

本校は平成30年度より、義務教育学校としてスタートし、4年目の学校で、全校児童生徒186名の小規模校です。小と中という分け方ではなく、9年間で1から4年までのステージ1、5から7年のステージ2、8、9年のステージ3と、3つのステージに分けるステージ制をとっております。とはいえ、小学校中学校ならではの取り組みがあり、様々な違いがみられます。そのため、色々なことに折り合いをつけるということがキーワードになってきました。現在も細かな調整が必要となっております。

### (2) 折り合いをつけるために

本校では1つの学校として捉えるという基本的な考えのもと、折り合いをつけるための様々な取り組みを行っております。1つ目としては、研修の工夫です。校内研では、グループ編成を工夫して、より多くの先生方と話す機会を持つようにしています。2つ目は、研修や行事などの共同実施です。色々な研修を通して、児童生徒を理解したり、若手の育成を図ったりしています。配布資料にはありませんが3つ目は教科担任制・TTの導入です。本校では2から7年まで、級外や後期課程での職員の協力のもと、色々な教科で教科担任制やTTを導入しています。そのため、学校全体として、9年間を見通した学習指導法の研究が必要となります。

## 本校の校内研究について

### (1) 研究主題

次は、本校の校内研究についてです。今年度から、児童生徒同士の学び合いに重点を置き、主体的な学びの実現を目指して研究を進めており、研究テーマが「できた」「わかった」「ありがとう」の声が響き合う学習指導方の研究～児童生徒が主体的に学び合う授業実践を通して～となっております。

### (2) 研究のねらい

研究のねらいは、児童生徒相互が学び合う学習を展開し、解決場面における効果的な教師の支援の在り方、理解の定着のさせ方について実践を通して明らかにすることです。

### (3) 研究の仮説

次に研究の仮説についてです。このように4つの項目に沿って研究を進めています。これは各ステージで、先ほどの4つの項目についてそれぞれの場面での具体的な手立てを考えて、日々の授業に取り組んでいます。

## 授業の実際について

3つ目は、授業の実際についてです。まず一斉授業と『学び合い』の違いです。一目見て分かるように、『学び合い』では、児童生徒がお互いに教え合ったり、自分の考えを伝えあったりして学んでいきます。基本的に授業スタイルは学習内容によって指導者に任せられていますが、今年度から『学

び合い』を始めたので、研究主任より授業モデルの例が示されています。御覧の通り、Aは先生方が普段されている授業とほとんど変わりません。ただ、できるだけ教師が話す時間を短くして、児童生徒に時間を確保することが必要となります。私が普段5年生で行っている授業を基に、授業の流れの一例を紹介します。

### (1) 合同な図形での実践

始めに、「語り」と呼ばれる話をします。1番伝えたいことは、一人も見捨てない、ということです。また、人に説明することで、自分の学びになっていくということも伝えていきます。『学び合い』のレベルを示すことで、問題ができたなら終わりではなく、より高い所を目指そうという意識づけができます。私はこのような話をしますが、語りの方法はそれぞれの教師で違います。毎時間のめあては、授業の最後にどうなっていればよいか分かるめあてにします。本校では、「何々が解けるようになる」、「説明することができる」、「何々することができる」などの言葉を使うことが多いです。ゴールの時間を提示して、学習活動に移ります。私は大体20分から30分くらいを使いますが、コロナ禍ということもあり、クラスによってさまざまです。教師は、いい考えをしている子の考えを広げたり、困っている子にどうすれば分かるようになるかを考えさせたりすることを、大きな声でつぶやきます。必ず誰かが聞いていて、その子の考えを聞きに行ったり、困っている子に声をかけたりしています。

子どもたちの様子です。まとめでは、応用問題を解かせたり、全体でまとめをしたり、様々です。まとめをしない時もあります。授業の最後には振り返りを書かせます。①「～が分かった。」、②「～ができるようになった。」、③「～がだいじだった。」、④「～したらうまくいった。」、⑤「～にきをつけたい。」、⑥「つぎは～をしたい。しりたい。」のキーワードを使って書かせるようにしています。

### (2) その他の授業では

この他にも、全体研やグループ研として、全員が授業公開を行いました。これは4年体育「マット運動」です。タブレットを使って、お互いの技を録画し、それを見ながらレベルアップするためのアドバイスをし合っていました。これは9年音楽鑑賞の授業です。曲を聴きながら、自分で題名をつけ、友達と意見交換をして全体で意見を共有していました。

## まとめ

### (1) 主体的に学ぶ児童生徒を育成するために

主体的に学ぶ児童生徒を育成するためには、教師の意識がとても重要になります。どれだけ児童生徒に委ねることができるかという意識改革が必要ではないかと考えます。本校では、校内研の終わりにその日の研修で学んだことを、明日からの自分の授業にどう生かすかを考え、研究主任がそれをまとめて、みんなで共有しています。研修をするたびに、教師の意識が高まってきているのがみられます。

### (2) 本校の校内研について 児童生徒の意識調査から

研究初年度として、大きな成果がまだ表れていないのが実状です。しかし、昨年12月に行われた県の学習状況調査の思考・判断・表現は、どの学年も県平均を上回っていました。また、無回答率が前年度に比べて大きく下がっている学年もありました。校内研で行った意識調査の結果、『学び合い』の授業は楽しい、どちらかといえば楽しいと答えた児童生徒は90%以上でした。その理由として、

友達の意見を知り、多くの意見を自分の考えに取り入れることができる、話を聞いているより、自分たちで学ぶ方が記憶に残るし、時間内は自分のペースで学習できるなどがあげられていました。

目指すべき教育の姿とは、先ほどから言われているように、何を教えるか、どう教えるかではなく、子供たちが何を学ぶか、どのように学ぶかを主体的に考え、選択していくものと考えています。それが、『学び合い』による授業を通して感じた自分の変化にも表れてきました。分からなかったところを諦めずに分かるまでするようになった、友達ばかりに頼らず、自分で考えるようになったなどです。これからも学校全体で折り合いをつけながら研究を進めていきたいと思えます。ただ、結果の検証においては、教員が頑張ったかどうかではなく、子どもが育っているかどうかという視点は忘れずにおきたいと思えます。ご清聴ありがとうございました。

### 【米田】

井手先生ありがとうございました。次は石井先生です。算数科における主体的・対話的で深い学びの視点から報告してもらいます。それではよろしく願いいたします。

### 【石井】

失礼します。それでは画面の共有をしたいと思います。神崎市立仁比山小学校で6年担任をしております、石井と申します。よろしく願いいたします。本日のシンポジウムでは、算数科における主体的・対話的で深い学びの視点から、というお題を頂戴しておりましたので、算数科という、今までの話から狭まった話になると思えますけれども、授業レベルで具体的に話ができればというふうに思っております。よろしく願いいたします。

### 「主体的・対話的で深い学び」について

まず「主体的・対話的で深い学び」についてですけれども、先ほどからあるように、まず目的は資質・能力の育成を目指すことということで、この育成を目指すうえで、日々実現していく学びになるかと思えます。

### 算数科において、どのように実現するか

じゃあ算数科においてどのように実現していくのかということですが、先ほど「数学的活動を通して」であったり、「数学的な見方・考え方を働かせながら」というような文言があります。

### 数学的活動とは

数学的活動とは何かということですが、「事象」を数理的に捉え、算数の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決する過程を遂行すること、となっております。ここで注目したいのは、「(生活・数学的)事象」と「算数の問題」を分けて考えているということです。そして、児童自身が解決したい問題として、児童が問題を見出すことを重視しています。

### 算数科における「見方・考え方」とは

では「見方・考え方」とはということですが、数量や図形、関係などに着目して捉えて、根拠を基に筋道立てて考え(論理的)、統合的・発展的に考えることです。論理的に表現すること、そして統合・発展ということが算数科においては特に大切かと思えます。何を学んだか、新たな知識が分かる

こと、積み重ねをいかした問題発見・問題解決ができることを目指して授業を考えていきます。

### 統合・発展について

何を統合させていくのか、どのようにそこから発展させていくのかについては、教材研究をする授業者が、その本質的な内容を捉えて、実際の授業の中での児童の姿にアンテナを張っておくことが大切です。その本時だけではなくて、単元内であったり、学年間、そして領域としての位置づけを捉えておくと、本時に向かうまでの布石が打てたり、本時の後のつながりが見えてくるかと思えます。

### 授業で大切にしていること

実際の授業で大切にしていることとしてですが、大きく 2 つあります。1 つ目が、問題発見の場面を設定するという、合わせていくつですかとか個数を問う問題とか色々ありますが、問題文が全部完成した状態で提示するのではなくて、リンゴが 3 つ、ミカンが 2 つとかイラストだけ提示したところで、合わせたり、差はいくつだとか子供たちから問いが出てきます。それを合わせて本時で解決したい問題というように設定をすることを心がけています。子供たちのつぶやきがまずあって、そこから問題を見いだすという手順を追っています。2 つ目、問題発見をしたら問題が解決する、そこで終わりではなくて、新たな問題を発見というサイクルを児童自身が回す思考の習慣化というところを大切にしています。「もし○○なら」「何とかして」「だったら」という思いと行動というところで、既習と未習をつなげていく児童を目指していきます。

### 問題発見につながる状況提示（例）

状況提示はどのようなものがあるかという例ですけれども、個数・式・条件などを□の空欄で示す、一瞬だけ見せる、一部分を隠して見せる、不足させておく、不要なものを混ぜておく、何度やっても教師が勝つような、何かおかしいんじゃないか、決まりがあるんじゃないかというようなゲームをする、予想させた後に、予想がずれるような、結果のずれが生じるものを用意する。このような子供たちが困り感を持ったときに、前のめりになって主体的に授業に臨んでいくことができるかと思えます。時間がないので、今回は□の空欄で示すという授業の例示をしたいと思えます。

### 授業の実際（第 6 学年 分数÷分数）

6 年担任をしておりますので、分数÷分数の 1 時目の授業です。割る数が分数というものは初めて経験するんですけれども、 $\square \div \frac{1}{4}$  という、□を使ったことによって、同じ  $\frac{1}{4} \div \frac{1}{4}$  にしたいとか、分母が同じ  $\frac{3}{4} \div \frac{1}{4}$  をしたいとか、いろんな思いが出てきて、そこから問題設定を行いました。1 時目の最後には、分母を揃えれば計算できるということに統合できましたので、第 2 時の布石としていきました。

第 2 時です。これまで学習した分数の割り算でどんなことができるかと振り返った時に、割る整数であったり、分母が同じ分数の割り算ができるということを押さえました。そこで子どもから、分母が違ったらという、素朴なつぶやきがでましたので、すかさず、 $\frac{4}{5} \div \frac{2}{3}$  という式を提示しました。困り感を持った子供たちは、分母は同じだったらいいのになとか、割る数が整数だったらよかったのに、分数から分数までだったらできるんだけど、整数÷整数だったらもっと簡単とかですね、いろんな思いや願いを持ちます。そして、「何とかして」という行動に移っていきます。通分する、同じ数をかける、逆数をかける、最小公倍数をかけるなどの行動に移っていきます。

第 3 時ですけれども、これも第 2 時と同じように、分母が異なる割る数を提示しました。この時  $\frac{7}{10}$

の、割る分母の 10 が嫌だなあとか、割る数の  $\frac{7}{10}$  が嫌だなあとか、いろんな思いを持った後に、それぞれ計算をしていきました。すると、途中に  $\frac{3}{5} \times \frac{7}{10}$  という共通する式があることに着目できましたので、分数÷分数というのは、結局割る数の逆数をかける、分数×分数の形になることに統合していきました。またここから「だったら」ということで、条件を変えたりして、範囲を広げていく発展の思考も大切にしていきます。繰り返しになりますが、状況と問いを合わせて解決したい問題を設定していくこと、「もし○○だったら良かったのに」じゃあ「何とかして」これができるん「だったら」次はこれ、というふうに、サイクルを回す思考の習慣化ということを心がけて授業を行い、諦めずに問題解決できる児童であったり、学びを自己調整できる児童の姿を求めているところです。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

### 【米田】

石井先生ありがとうございました。

次は竹下先生です。若手教員としての立場から報告してもらいます。それではよろしく願いいたします。

### 【竹下】

はい、よろしく願いします。画面を共有します。

それでは、主体的・対話的で深い学びに向けて、2年目教員が考え実践していることということで発表させていただきます。私は、教職大学院を2年前に修了した3期生です。米田先生のゼミに所属して、2年間たくさん研究をさせていただいたところです。また、本日の基調提案をしていただいた岡先生のゼミにも勝手にお願いをしてですね、ゼミに参加させていただいて、いろんな学びを得た、そんな経験があります。今となっても、このような経験を持たせていただいたお二方の先生には非常に感謝しております。ありがとうございます。現在は、多良中学校で中学校3年生の担任をしています。教科は数学です。本日は以下の流れで発表させていただきます。

### 2年目教員ならではの悩み

まず、2年目教員ならではの悩みということで、大学院時代は授業について深く勉強をしてきましたが、それ以外にも、生徒指導や保護者対応とか、学級経営とか、いろんな業務があるなかで、なかなかですね、その業務に追われて出来ていないことも多々あるなあと、いっぱいある業務をですね、いかにこなしていくかというところは、どの2年目教員も今悩んでいるところかなと思います。そういった中で、とにかく走り続けることと、時には考えること、このサイクルを回しながら何とか頑張れているところです。

### 理論と実践の往還

続いて、理論と実践の往還です。教職大学院が常に謳っているこの理論と実践の往還を今でも続けることができているかなと、それも、教職大学院で学んだ1つの成果かなと思っています。大学院での私の研究テーマは、数学的活動の「楽しさ」を実感する授業づくり—フロー理論に着目して—という研究テーマでした。その他にもですね、一緒に学んできた仲間達の、様々な足場となる理論というものには教職に就いた今でも、何かヒントになるんじゃないかとか、そういえばこういうこと言ってたとかですね、そういったところをヒントにしながら、日々授業に向けて開発を行っているところで

す。例えば、先ほど紹介したフロー理論というものは、物事に没頭することを指します。この没頭するための1つの条件として、個人の能力と、互いの難易度が密接に釣り合う必要がある、という理論です。例えばゲームとかですね、レベルが低すぎると退屈だし、高すぎるとやる気が出ないな、頑張ればクリアできそうぐらいが楽しいよね、こういう時に子供たちは没頭すると、そういったところがこの理論です。じゃあこれがどうやって生きてくるかなと考えたときに、ここ最近では知識・技能を身に付ける手段としてこのフロー理論を活用できないか、ということを考えていたりしています。つまり、頑張ったらできるレベルの問題、数学でもですね、このようなものを適切に位置づけることができれば、子供たちが没頭しながら、知識・技能の定着に向かうことができるのではないかなというようなことを自分なりに考えて、ではドリル教材でスモールステップを意識してみようかとかですね、時間があるときには、そういったドリル教材を設定したりしています。

このように、大学院時代に学んだこの理論と実践の往還というものを常に回しながらですね、やれているかなと思いますが、実際に悩みもあって、こんな力を育みたい、こういうことができるようになってほしい、という自分の理想とした子供の姿があるのに対し、子供たちは「先生、今日こういうことがしたいんですよ」「そういうことがしたいんじゃないんですよ」と、「先生、こういうことがしたいとわかるんですけども、そもそもこれできませんよ」とか、そういった教師の想いと子どもたちの実態にギャップがあるのが現状かなと思います。例えば、去年の実践なんですけれども、教員が、連立方程式で分かっていない2つの数量を求めて、パフォーマンス課題を設けてですね、求めた解というのが文脈に沿ってちゃんと合っているのか、という吟味する力を育みたい、というところですね、パフォーマンス課題を提示したところ、そもそも1年生の時の1次方程式が解けません、必修事項の定着の課題があったりとか、子供たちの日常生活とはかけ離れていて、なんとなく子供たちの必要感とのずれを感じたりとか、そういったところでギャップを感じたところです。最低限の知識・技能が身につけていないと、思考とか判断とかできないし、子供たちが興味を持たなければ、主体的な学びにはつながらないなと、そういったところで日々悩んでいるところです。

ただ、これらのギャップを埋めていくのが、まさに主体的・対話的で深い学びによる授業改善なのではないかなと感じているところです。身に付けさせたい力、子どもたちの姿、そういったものと子どもたちの実態を授業の中でどうすり合わせていくか、どう理想に近づけていくかという視点を持って、日々頑張っていて、悩んでいるところです。

## 主体的・対話的で深い学びに向けた実践

### (1) ウェビングマップによる振り返り

では実際に、そんな中で主体的・対話的で深い学びに向けた実践を少し紹介しておしまいにしたいと思います。今回は授業中の手立てというよりは、子供たちの主体的・対話的で深い学びを助けるためのツールを2つ紹介したいと思います。

1つ目は、今年度の取り組みとして行っている、ウェビングマップによる振り返りです。単元を通して、振り返りシートを作っております。授業の最後に5分時間を取って、まずウェビングマップをつかって、今日学んだことをどんどん広げていきます。ここで、前時までの知識とのつながりを子供たちに可視化させます。そして、そのウェビングマップをもとに、学習の振り返りを言語化させる、このような活動を行っています。このウェビングマップと言語化というのを繰り返していく中で、単元末の振り返りにおいて、こういった変容がみられるのかということの評価していきたいなというところで、主体的な学びにつなげるための1つのツールとして行っています。子供たちの中には、その

学習を整理して記述したりとか、日常ではこういったところに使えていることが分かったので、じゃあ他にはどんな使われ方をしているのかな、というような記述も何人か増えてきたところですが。ただまだまだですね、この言語化と可視化のサイクルがなかなかできていない生徒もいます。そのあたりは、来年度に向けた課題かなというようなところが感じられます。

## (2) 「図鑑」を活用した知識の体系化

続いての2つ目のツールは、「図鑑」を活用した知識の体系化です。これは去年の実践になるのですが、例えば、図形の性質について学ぶ単元では、「図鑑」というものを生徒は1人1人持っています。開くと「図鑑」があるんですけども、この中に、性質であったりとか、図を可視化したりとか、じゃあその図を言語化すると、こういうものになる、というものを生徒たちが「図鑑」にどんどん武器を登録していくよ」といって実践をしていきました。こういうふうに教科書に載っているレベルのものもあれば、例えば問題演習、ワークを解いていく中で、この形ってよく出てくるよねということで、それも「図鑑」に登録をしていく、というようなものも行っていました。なので、このようなクラスによってはですね、錯覚を2回使うから錯覚×2で名前を登録するとか、鉛筆の形に似てるのでえんぴつ型とか、それぞれの子どもの言葉で知識をどんどん体系化させていきました。

こういった活動を行っていたのですが、最終的な目的としては、対話的な学びを助けるためのツールとして使いたかったというのが1つあります。この単元の1番最後の授業では、このようなパフォーマンス課題を用意しました。星型多角形の長角の和を求め、根拠を説明する活動ということで、任意の星型多角形を子供たちに書かせた後、長角の和はいくらになるだろうかというものを予想させて、それを説明させるという活動を行いました。実際のワークシートなのですが、このように「図鑑」のNo.14を使ったよ、No.14というのはここに着目したよと、これぐらいの簡単な言葉で子供たちが思考の流れを可視化できるので、低位の子でも説明が何とか出来た、「図鑑」が共通言語になって、話し合いが活発化したんじゃないかなと思います。難しい数学用語を使うのではなく、「図鑑」の言葉を使って、話し合いをする姿が見られました。

このように、実際に子供たちが机に水色の紙を置いていると思うんですけども、これが「図鑑」です。「図鑑」を使って共同で活用したりとか、実際に発表する時も「図鑑」の何番の何を見てください、というような発表にも活用できたので、これは今後も使っていきたいなと思っている実践です。いろんな実践をしてきましたが、まずは授業の中で、まだまだ2年目ですので、いろんなことを試しながら子供たちがうまくいったとか、昨日までは死んだような顔をして数学を受けていたけれど、今日は楽しそうだぞ、とかですね、そういったところを日々感じながら、じゃあなぜ上手くいったのか、なぜ上手くいかなかったのか、そういったところを子供たちと一緒に今、頑張ってる悩んでいるところです。子供も教師も楽しく学べる授業というものを目指して、日々頑張っているところです。

以上で発表を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## 【米田】

竹下先生ありがとうございました。

最後に石橋先生です。英語科における主体的・対話的で深い学びの視点から報告させていただきます。それではよろしくお願いたします。

## 【石橋】

はい、よろしくお願いします。共有をさせていただきます。

最後ということで、たくさん先生方の話を聞かれていますので、大抵同じような内容ではありますが、少し高校の方に話を持っていったというところですので、気軽に聞いていただければなと思っております。佐賀県立小城高等学校 3 年の学年主任をさせてもらっております。9 年目となっております。3 年生のこの時期にここにいていいのかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、大丈夫です。頑張っていきたいと思います。私は主に、主体的・対話的で深い学びのなかでも、対話的というものを中心にして、対話的などころから主体性、対話的などころから深い学びに、というふうの流れでいく授業形態というものを主にやっております。

## 教育理念

私自身よく子供たちに言っていることというのは、生涯学習ということです。常に学び続けてください、ということです。小中高大に行って終わりではなくて、社会に出るともっとテキストにない学びというもの、学習というもの、問題というものがあるので、そこでどう、それにぶち当たった時に乗り越えていくのか、解決していくのか。常に学習意欲というものを持っていきましょう、そのためには、やはり主体的に自分たちで学んでいかなければならないという動きになります。じゃあその主体的になるというのを、あくまでもこれは私の考え方ではありますが、知的興味関心、そして学びへの関わり、そして持続性この 3 つをきちんと持つておかなければならないだろうと思っております。上の 2 つに関しましては、1 人だけで学ぼうと思えば、知識の制限がかかってしまいまして、どうすればいいのかなわかんない、これどうかなわかんない、実はもう一個先にもっと面白い知識があるにも関わらず、それに気づかない、ということがあります。持続性に関しましては、やはりモチベーションですよね。学び続けていきたい、学びたいという思いをどう持続させていくのか、というところになります。

そこで、私はこの対話的というところにフォーカスしておりまして、対話というところで、他者からの刺激、他者からの動機づけ、なんであの人はこういうことを知っているんだとか、どうすればもっとそうやって勉強できるのか、あるいは自分が言ったことによって仲間が返してくれる、もしくは仲間から感謝をされたりする、仲間とともに一つの大きなプログラムが解決できるというところから、もっともっと学びたい、じゃあ自分は何ができるだろう、この中で自分はどういう役割があるのか、どう役に立つのか、というところから主体性が入っていきます。

## 対話的

また、対話的に学ぶことによって、知識の共有、そして知識の拡大、そして自分の知識、他者の知識が融合することによって、新たな知識が生まれていく。そうやって知識が広がっていく中で、自分の考え方に広がり深みを持っていく。そうすることで、深い学びというものが生まれていく。そういうふうにして授業を今つくらせていただいております。先ほど、岡教授の中にもありました、アメリカの方にも 21 世紀型の学習というものがあまして、私もどちらかというところの 21 世紀型の能力「生きる力」というものをどういうふうで育んでいくのかというのを念頭に置いて、思考力というものをきちんと育てていきながらですね、様々な力を使って仲間と一緒に協働して、実践的に戦っていく。今を生きていく、そして未来を生きていく。そういうところを育んでいければなと考えております。

## CLIL と SDGs

そこで、私は CLIL という指導の方法と、SDGs 活動というものを組み合わせて授業をつくらせていただいております。もちろん、教科書というものをきちんとベースにおいてつくっていますので、教科書からかけ離れているとか、私自身が何かしらものすごくつくりこんで、何かをしているというわけではありません。CLIL というですね、内容言語統合型学習、教科書に書かれている内容、そして学ぶべき言語、その使い方、その場面、そういうものを、まとめて勉強しようではないかという考え方です。これは、Mehisto という方が主に言われておりますが、Learn as you use, use as you learn という形で、使うように学び、学ぶように使いなさいという、需要と学び、学習を同時に行っていきましようね、という考え方があります。そして、これは上智大学の和泉教授によると、様々な知的興味関心の方に働きかけが有効であるというふうに言われております。

## 4Cs(Content,Communication Cognition,Culture)

ちょっと英語になって申し訳ないんですけども、この CLIL の中では 4Cs といわれる、内容を理解して、そしてコミュニケーションに使うための言語や方法、場면을認知して、Cognition ですね、使い方、あるいは物事の考え方を認知していく。そして、文化的な側面、もしくは地域、共同体としての考え方というものを育ていける教育の方法となっています。世界的な規模の社会的な問題を、じゃあ地域ではどのように解決していくのか、地域ではどう考えているのか、あなたは何ができるのかという、世界的な規模を地域的なものに、そして地域的な規模から世界的な発展にしていこうという、グローバルな視点で物事を進めていこうという発想になります。

また、授業においても、低次思考力といいますけれども、ただ覚えるとか、ただ理解するとか、ああそういうことだ、というだけではなくて、そこで学んだことを通して、知識や理解を通して、じゃあもっと新しい何かができるのではないかという、創造性 Creating ができた、あるいは、今ある問題を Analyzing ですね、分析をしていき、じゃあ新しい解決策はどういうものなのかというものをやったり、今ある解決策は何が良くて何が足りないのかという評価 Evaluation していくという高次思考力というものを使って授業をしていくことによって、子供たちの能力が伸びていくのではないか、ということなんです。

### (1) 理想の学校とは？

ここです、昨年度、そして3年生の2学期までやっておりました中で、3つ SDGs 活動を紹介したいと思います。まず1つ目が理想的な学校とは何か、というところです。これは、バリのグリーンスクールというものの紹介英文を使いまして、やはりオーセンティックなところで、今、世界ではどのような学校があつてどういう学び方をされていて、どういう学校を理想としているのか、というものを、たくさん読みます。オーセンティックな教材として問題集だけでなく、新聞記事とか雑誌の記事もたくさん読んでいきます。もちろんこれは、問題の因果関係であつたりとか、自分自身が今後、理想的な学校というものをづくり、探すときの意見の証拠探しになります。これは、もちろん私の学校は大学入試というものを念頭に置いておりますので、大学入試にもきちんと生きるような形で勉強をさせてはいます。

実は、この理想的な学校をどうやってつくっていこうかなど、考えていくときの問題の考え方は、入試の問題となるような部分をきちんと読み込んでいくことで、内容が分かりやすくなっている、自然と大学入試の問題提示の場所であつたりとか、問題の作り方というところが分かるようにしており

ます。実際に彼らは、この理想的な学校というものをつくって、学校の広報部となったらあなた方はどういうふうパンフレットをつくりませんか？ということで、皆さんが写真のような形で授業をして、プレゼンテーションしているところですね。これは、森の中に小学校を立て、海の近くに中学校を建て、高校では、バスや飛行機を使って日本全国を飛び回るようなことができればいいんじゃないかという、無理難題をできるところではありますが、ここで、仲間からは予算の問題があるとか、これで何が学べるんだとか、こういうふうな意見交換とがありながらやっていったところです。

## (2) インド女性トイレ問題

また、インドの女性のトイレ問題に関しましては、実際に SDGs の問題提起を YouTube であったり、あるいは TikTok など動画視聴をしていきます。そして、インドでどのような問題が起きているのかというものも実際に主張をしていきます。そこで問題の内容をまとめ、因果関係をまとめていく、という作業をしています。もちろん、これも受験と考えればリスニングの関係性を十分に持っています。ここでやはり女の子たちが、女性がなぜこんなに蔑まれないといけないのか、なぜ女性の人権というものがこんなにも迫害されないといけないのかという、強い怒りを持ってですね、私たちにできることは何なのかということで、クラウドファンディングを実施しまして、実際にお金を集めまして、現地に公共のトイレをつくるように動いております。お金はもう既に溜まりましたので、今は3年生から2年生の方に、この活動を引き継ぎまして、2年生の女子たちが、現地にトイレがつくれるようにしております。あと数年後には、小城高校の女の子たちがクラウドファンディングで貯めたお金で公共のトイレができる予定となっております。

## (3) ネパールの教育事情

そして3つ目は、ネパールの教育事情です。教育というものを全世界的にどのように教育が行われているのか、教育ができていない発展途上国とかもあるよねというところから、ネパールのヒマラヤで実際に小学校を建てられた吉岡大樹さんに小城高校に来ていただいて、講演をしていただいて、教員不足、そして教材不足というものを熱く語っていただきました。そこから、私たち小城校生ができることは何かということで、子供たちに分かりやすく英語の勉強、日本語の勉強、そして、海外に視野を向けてもらうような絵本をつくらうではないかということで、絵本作成をさせていただきました。そこでは、子供がどのような心理をもっているのかということで、幼稚園教育の本であったり、小学校教育の本であったり、あるいはそれに関する心理的な英文というものを読んで、物語作成を行っていきます。もちろん、これは受験に関しては英作文や英文強化ということになります。子供たちに実際に絵本をネパールに送りまして、支援しまして、子供たちにそれをつかってもらって、子供たちから何が面白かったのか、何が足りなかったのか、もっとどうしてほしかったのかという、現地の小学生から実際にフィードバックをもらうことによって、次の絵本作成をしていくというふうな形で、実際にオーセンティックなもの、そしてオーセンティックな場所、オーセンティックな現状で、今を生きる子供たちとどう向かい合っていくのか、というところで子供たちがやってきました。

おかげで、今ネパールの市の方々から感謝状とか、そういうものをもらっております。こういうような形で、いま対話的にですね、色んなことを子供たちが、生徒たちが考えて、考えて深めていきながら実際にそれを物事として形にして世界に発信していくことでまた学んでいく、これは世界との対話的な学習であると。そこで、世界的に、そして地域的にいろんな人から情報をもらって深く学んでいく。じゃあ、私はどうできるか、私は何ができるのか、主体的に学んでいくというふうになってい

きました。

## 共通テスト結果

実際に教員の中には、遊びではないか、ただ活動をしているだけではないかというふうに言われておりますが、この子達、1.03倍とですね、ちょっと苦しいところから入ってきておりますので、高校1年生の時点で英語の偏差値42ではいってきております。しかしながら、先日行われました、共通テストに関しましては、全国平均が61の平均点に対して、私たち小城高校は67の平均点、すなわち、偏差値でいきますと52というところまで上がって、子供たちが英語の学習がきちんとできております。大学入試だけに特化したような授業でなくても、十分に日本の大学における活動というものは成績としては伸びていきますし、また、このような活動を通して個人個人が主体的に学び始め、結果として授業で行ったようなことを個人でも行っていきながら難関大と呼ばれるようなところにも、総合型学習、あるいは推薦型というところでたくさん合格を今勝ち取っているところですので、このような形で高校でもですね、どんどん対話的、そしてそれを通して主体的で深い学びというものができているというところで、一つの実践報告ではありますが、紹介をしておきたいと思います。以下がReferencesとなっておりますので、確認をしていただければと思っております。以上です。ありがとうございました。

### 【米田】

石橋先生、ありがとうございました。これで、シンポジウム報告を終わります。

## ディスカッション

### 【米田】

4人の先生方に私の方からいくつか質問をしていきたいと思います。まずは竹下先生にお尋ねしたいと思います。主体的・対話的で深い学びを実現するというところで具体例として、ウェビングマップとか図形の性質とか、大変興味深く聞かさせていただきました。またギャップとかですね、苦労しているところもあるのも分かりました。今日ですね、いろんな先生方の発表を聞いてこれから自分も取り組んでいきたいなとか、今の自分にはここがまだ必要だなとか思ったことがあったら教えて頂きたいなと思います。

### 【竹下】

はい、ありがとうございます。やはり日々ですね、そのようなギャップを感じながらそこをどう埋めていくかというところを考えて実践しているところですが、やはり先程の石井先生の授業、算数科の授業であったので、数学科と深く関わるところがあるので非常に参考になりました。ありがとうございました。特にですね、もし○○だったらなというところをもっと子どもたちから引き出してですね、その中で自分が使えるものって何だろうっていうものを子どもたちがイメージしながら、じゃあ使えるものを使って何とかして解決しようよ、そういった流れをやっぱり授業の中でも常に仕組んでいくことというのは大事なのかなというところでヒントを得ました。

石橋先生も本当にありがとうございました。レベルが高すぎてですね、僕も勉強になることばかりだったんですけどもやはり、真正の評価って考えた時に、どうしてもなかなか難しいなと、日常とどうつなげよう、数学とどうつなげようと普段からよく考えているものの、なかなか自分の中で納得

いくようなものがないんですけれども、SDGs, 今の課題, 実際に今, 社会の中で課題としていところ焦点を当てるとかそういったところを上手く引き出すことができればですね, 子どもたちもやっぱり今を生きているのでそういったところで子どもたちの興味・関心を引きながらですね, 授業を進められるんじゃないかなということで, パフォーマンス評価, 真正の評価をしていくにあたっての1つの視点というものは先程の石橋先生の話の中でも得ることができました。本当にありがとうございました。以上です。

**【米田】**

はい, 竹下先生ありがとうございました。次にですね, 石井先生と石橋先生にお尋ねしたいと思います。竹下先生の方からですね, 理想とする授業, ギャップというようなお話が出てきたかと思ます。先生方の発表でも主体的・対話的で深い学びの実現のために, 理想とするような授業の形態というものが見られたと思います。どうやって先生方はですね, そういう授業にたどり着かれたのか, またですね, 目の前の子どもや自身の授業力のギャップをこれまでどうやって乗り越えられたのかについてお話頂けますでしょうか。

まずは, 石井先生お願い致します。

**【石井】**

はい, 失礼します。私自身もですね, やはり子どもたちの知識がどれだけ習熟しているかという積み重ねの部分が見えてなくて, 授業で反省したことが何度もあります。レディネス調整をどのようにしていくのかとかですね, あとは問題を課題として子どもたちにぼんっとさせようとした時にさせようというところで, 子どもたちがなんでそれを解かないといけないのかとか, 解きたい問題になっていないというところに痛感した時もありました。教材研究をすればするほどですね, こういう面白いことがあるんだと子どもたちに伝えようと思うと, やっぱり教師の思いが強すぎて教師の思いと子どもたちの思いとの先程の竹下先生のフロー理論じゃないですけど, バランスが取れなくなるわけですね。なので, そういう授業をしていくと子どもたちが間違いを怖がってノートに書かなかったり, あとで教師が答えを教えてくれるんでしようということなので答えを待ってしまうようになりですね, それこそ主体的とは離れてしまうことになるので, 今日提案したような状況提示をするということとか, もし〇〇ならとか既習と未習をどうにかつなげようとして児童自身がするというのを大切にしていきました。諦めずに挑戦したりとか, 自己調整したりといったところを評価したりとかですね, あとは, 授業の中で間違いがあっても, その間違いから学ぶというのはやはり大切にしながら行って, 自由に発言するということも認めていきました。

どうしても, こういう授業をしたいとなるとルールが見えてしまうんですけども, ルールが見えないようにとかですね, 教師がちゃんと間を取って, 間合いを取りながら, ちょっと混沌とした, カオスな状態になるのも教師自身が楽しむとまた授業が変わってくるのかなというふうに考えています。以上です。

**【米田】**

はい, ありがとうございました。それでは, 石橋先生お願いできますでしょうか。

**【石橋】**

はい、石橋です。竹下先生のお話ですね、はい。フロー理論とかとても大好きで聞かさせて頂きましたが、まず簡単に言うと、たくさん本を読むこととたくさん先輩先生の授業を見て、たくさん先輩先生に話を聞くというのが1番いいんですよね。先輩先生は最初、「授業見に行ってもいいですか」と言うと、「俺の授業見たって」って言われるんですけど、見終わった後、いっぱい話してくれます。こう考えているから、こう考えている、あの子ってこうだろうみたいな、やはり若い僕らの時には見えていない視点で子どもたちを見てくださってることが多いので、まずそれは、先輩先生の授業をたくさん見に行くっていうのは非常に良いかなと思うことが1つ。

あとはですね、やはり私たち教員は、こういう理論でこういう授業をして、こういう子どもたちを育てたいというのがありますが、まずはですね、子どもたちが自分たちが何を学びたくて、どう生きていきたいのか、どういうことを知りたいのか、まずここをきちんと刺激してあげることだと思います。きちんと子どもたちが学びたいものに寄り添って、子どもたちが、こういうことを学びたい、こういうことを学べたというその中で自己肯定感とか学びの楽しさを分かっていますので、そこにですね、少しずつ彼らに気づかれないように自分の理想とするものを入れていくんですね。「じゃあ、これがこうなったらどうしよう、こうなるとどうする」のような「i+1」の考え方で、ちょっと難しめ、ちょっと理論的というものを少しずつ増やしていくことによって、子どもたちが学びたいことをさせながら、少しずつ自分たちがさせたかったものに近づけていくという動きをすると、モチベーション維持っていうのはありますし、そのスモールステップを踏むことで、子どもたちはすごく自己肯定感も高まりますので、かなりモチベーションと学習意欲は上がっていきますので、最終的に自分がこうありたいという授業に近づいていくかと思っておりますので、まずは目の前の子どもたちをしっかりと見て授業することだと思います。以上です。

**【米田】**

はい、ありがとうございます。授業づくりのヒントがたくさんあったのではないかなと思います。それでは、視点を変えて質問をしたいと思っております。井手先生にお尋ねしたいと思っております。学校の研究の取り組みについてお話をさせて頂きました。井手先生自身が実感されている先生方や子どもたちの姿から学びの変革が行っているなど思われていることについて話をさせて頂きたいのと、ここはまだ不十分なんじゃないかなと先生が実感されているところでいいですので、話をさせて頂けたらと思っております。

**【井手】**

失礼します。まずは、今回、校内研で初めて取り組んだ先生たちも多くいるんですけど、どんなんでしたかと職員室で話をしたりするんですけど、やっぱりペーパーでは分からない部分が子どもたちの活動の中で見えるようになったというふうに言われることが多いです。例えば、ある先生だったんですけど、今までは1人がよく寝る子がいたとすると、その子が寝ないような授業を考えるという方に視点がいったんだけど、分かったことを言語化しているところを見ると、理解力がわかるとか、本人たちが本当に分かったどうかを確認するための活用する場面を作れるようになったとかいうふうな深い学びの方に授業の作り方が変わってきているんじゃないかなと思います。

子どもたちからするとですね、ある子のことなんですけども、2年くらい前まで授業中に寝てた小学生がいるんですけど、その子はちょっと学力的に低くてですね、みんなと勉強するのがきつくてもうわかんないから寝るみたいな感じだったんですけども、学び合いを始めてからは友達に聞いたり、

たまに自分が教えたりすることが増えてきました。すると、周りの子ども〇〇君、覚醒してきたんじゃないと周りの評価も変わって、先程の宮崎校長先生のお話にもあったんですけども、自分のよさとか可能性が分かったというか、分かったつもりなのかもしれないんですけど、授業に対しての意識ががらっと変わってですね、4年生まで全然かけ算を覚えてなかったんですけども、もう今はばっちり覚えてですね、わり算も暗算でできるようになったりとか、少しずつ変わってきている子どもたちもいるので、そういうところで変わってきているなと感じます。以上です。

### 【米田】

はい、ありがとうございます。それでは続いて、宮崎先生の方にお尋ねしたいと思います。校長先生の発表で、社会に開かれた教育課程の3つのポイントというのを聞きまして、もう少し詳しく具体的な話をお聞きしたいなと私自身思いました。よりよい学校教育を通じて、よりよい社会をつくるための目標を学校と社会とが共有みたいなことがあったかと思うんですが、具体例があればお聞きしたいと思います。また、その際に心がけたこと、それ以外にもですね、これから取り組もうと考えていらっしゃるようなことがあれば、お願い致します。

### 【宮崎】

それでは、先程の件についてなんですけれども、まずですね、報告の中でも話をしましたが、1つ目のより良い学校教育を通じてよりよい社会をつくるという目標を学校と社会が共有と、そのところの核となる組織として、学校運営協議会を活用しました。嬉野市は市内すべての学校がコミュニティースクールを導入しています。それから両輪となる地域コミュニティの組織もあります。事務局も校区内にあります。そういう方たちもメンバーに入れた本校の学校運営協議会がありまして、その中には、地域コミュニティの会長さんでありますとか、事務局の事務局総長さんも入って頂いています。第1回目の学校運営協議会の時にはですね、本校の学校教育目標の説明をするんですけども、ちょっと共有させてください。これが本校の教育目標です。このところに先ほど言いました前文の中にある持続可能な社会の創り手とするためにというこの文言を今年入れましたという話をしました。その理由を話す中で、皆さんにも先ほど報告しました、何故これなのかというところを話をして、まず1つ目の目標の共有を図ったというところなんです。

2つ目のこれからの社会を創り出していく子どもたちに必要な資質・能力は何かを明らかにするところなんですけれども、これについては、やはりメンバーの方は一般の方ですので、あまり専門的な言葉を使ってもなかなか難しい、イメージしにくいというところがありましたので、ざっくりとですね、その時には、そのために子どもたちには、1つは問題を解決する力、そのためのコミュニケーションするための力を身に付けさせたいと思っていますということでお話をし、それを一緒に身に付けていきたいと思いますというお話をしたところです。

実際に、どんなことをやりたいというふうに思ったかという、先程申し上げたようにただ単にお客さんとして参加するのではなくて、何か子どもたち自身が地域貢献、地域のために役立つものがないかということで考えていたところの1つにですね、市内に嬉野高校がありまして、福祉系列というのが本学にあります。そこでユニバーサルデザインでありますとか、福祉関係のことをやってらっしゃいますので、その中で認知症サポーターの取り組みをされていました。その方に来て頂いて、子どもたちに受講させて、その取り組みを活かして実際に地域に出ていくということを考えていました。

ただ、残念ながらですね、コロナ禍のため実際にはできていないんですけども、ぜひ落ち着けば、

その活動をしながらですね、先ほど申し上げた、実際に出て行って活動をやっていききたいなと思います。

**【米田】**

ありがとうございました。最後に岡先生にお尋ねしたいと思います。これからの学びの変革を担っていく教職大学院で学ぶ学生、現職、ストレートマスターといますが、その学生に期待することについて簡単に話していただきたいと思います。

**【岡】**

はい、時間が来てしまいましたけれども、簡単に話させて頂きたいと思います。今日は、5人の先生方にお話頂いて、うちの院生も学生も多くのことを学んだかと思えます。もうわたくしが語らなくともいいかなと思うくらいに深い実践の語りを聞かせて頂きました。ありがとうございました。

私自身が大学の時に学んでほしいと思うことが2つございます。1つは、この教職大学院というのは現職院生とストレートマスターと非常に面白い大学院です。そういう大学院の中でですね、まずは教育の根本をそういう先生方、それからストレートマスターの仲間と議論し合いながらですね、考えて掴んでいただきたいと思えます。教えるとは何か、学ぶとは何か、本物の学びとは何か、あくなき探究のプロセスとは何か、今日はそれぞれについてヒントをたくさん得られたかと思えますので、もう一度考えて頂ければなと思えます。

それから2点目は、教科の本質に近づくよう努力することということです。すなわち、教材研究ということです。1つでもいいので、学校の外に広がる学問の面白さを感じさせるもの、あるいは子どもにとっても、教師にとっても奥深く意味のある深い教材を開発してもらいたい、そういうものに挑戦してもらいたいと思えます。浅くて貧弱な教材ではなく、子どもを深い学びの世界へ誘う、そういう教材が見つければなと、1つでも見つけてもらおうと次へ次へとつながっていくんじゃないかと思えます。これからも教職大学院、今日の先生方のお話を聞きながら、一層励んでまいりたいと思えます。本当にありがとうございました。

**【米田】**

これで、ディスカッションを終わりたいと思えます。本日のシンポジウムの内容は今後の研究のヒントになることが多く盛り込まれていました。今後も教職大学院の学生とともに学校現場で生きる研究を佐賀大学大学院学校教育学研究科では目指していきたいと思っております。本日は、発表者の方、参加者の皆様、ありがとうございました。

(2023年1月31日 受理)